

第8回

元気に跳ね回るバロック音楽 ～西洋音楽の歴史と鑑賞 (2)～

学習のねらい

クラシック音楽の世界では17世紀から18世紀半ばまでを、一般に「バロック時代」と呼んでいます。今回は、この時代のはじまりのきっかけがオペラというジャンルの誕生にあったことを踏まえ、とりわけ「協奏曲」にポイントを絞って、その「元気に跳ねまわる」ような音楽の世界を探っていきます。協奏曲ではどのような形式が用いられているのか、そしてどのようなタイプの協奏曲があるのかなどについて学んでいきましょう。



講師
沼野雄司

バロック時代という概念について理解を深める

音楽史におけるバロック時代というのは、1600年ごろから1700年代前半くらいの間を指します。日本では関ヶ原の戦いが1600年、そして1603年に江戸幕府が開かれますから、バロック期と江戸時代の始まりはほぼ同じということになります。この時期にオペラ、という演劇と音楽が一体化した新しいジャンルがイタリアで誕生しました。

物語をシンプルに伝えるために、和音と簡潔な新しい音楽様式が生まれ、やがてそれが器楽にも波及してゆくこととなります。こうしてクラシック音楽全体に新しい風が吹き始めたのでした。この「オペラ」については、これから先に詳しく説明する機会があるので、今回はバロック期の器楽の性格について考えていきましょう。

協奏曲とリトルネッロ形式の関係について考える

バロック期の音楽の「わかりやすさ」を保証しているのは、ひと言でいえば「対比の原理」です。たとえば、フォルテ（強い音）とピアノ（弱い音）、長調と短調、速いテンポと遅いテンポ、というように、はっきりとした2つの対立の軸が作品を形成しているというわけです。ゆえに、器楽に関して、こうしたバロック音楽の代表と言えるのが「協奏曲」です。

独奏と管弦楽が交互に主導権を握りながら、音楽が前へ前へと進んでいくこのジャンルは、見ても聞いても楽しい音楽といえるかもしれません。そして、バロック期の協奏曲の多くが「リトルネッロ形式」と呼ばれる形式で書かれています。これは単純に言えば独奏と合奏が交互にあらわれるという形式で、合奏部分ではだいたい同じような主題が用いられるのが特徴です。つまり定型的な合奏部に挟まれながら、独奏楽器がある程度自由に動き回るといえるわけです。

バロック期の作曲家の中でも、イタリアの A. ヴィヴァルディ (1678 ~ 1741) は、500 を超える数の協奏曲を書いたことで知られています。

コレッリからバッハにいたるバロック音楽を体験する

「協奏曲」というと、独奏楽器と管弦楽による音楽をふつうは指しますが、バロック期には「合奏協奏曲」というジャンルも多く書かれています。これは弦楽器 2 ~ 3 本とチェンバロからなる小さな合奏体と大合奏が交互にあらわれる形式で、つまり小合奏を「独奏部」にみたてた協奏曲といえます。イタリアの A. コレッリ (1653 ~ 1713) の「作品 6」などはこのジャンルの代表作といえるでしょう。

そしてバロック期の最後を飾る作曲家がドイツの J.S. バッハ (1685 ~ 1750) です。バッハは生涯にわたって、さまざまなジャンルの作品を書いていますが、中でも独唱、合唱、オーケストラによって聖書の内容をわかりやすく伝える「教会カンタータ」はもっとも重要なもののひとつです。また、彼はすぐれたオルガン奏者、チェンバロ奏者でもありましたから、多くの鍵盤楽曲も作曲しています。誰もが冒頭部分を聴いたことのある「トッカータとフーガ ニ短調」はその代表作といえるでしょう。

♪ 今回取り上げる曲 ♪♪♪

- オペラ「オルフェオ」から「トッカータ」「プロローグ」 : 作曲 モンテヴェルディ
- 2台のヴァイオリンのための協奏曲イ短調 : 作曲 ヴィヴァルディ
- 合奏協奏曲ト短調 作品 6-8 : 作曲 コレッリ
- カンタータ第 147 番
「心と口と行いと生活で」から「主よ人の望みの喜びよ」 : 作曲 バッハ
- トッカータとフーガニ短調 : 作曲 バッハ